

論文

日本人学生における入学時のキャリア形成に対する意識と
その後の変化の実態調査

A Survey on the Japanese Freshmen's Consciousness and Its
Change towards the Career Formations

高橋 功*・久保田 靖子**

Isao Takahashi and Yasuko Kubota

キーワード: 大学教育, 新入生, キャリア形成, キャリア教育

Keywords: University Education, Freshmen, Career Formation, Career Education

問題と目的

“就職氷河期”という造語が流行した 1990 年代半ば以降, 大学・短期大学の新規学卒者の雇用情勢は, 悪化の一途を辿り, 社会問題の一つとして広く認識されるに至った。この問題の背景には, 経済のグローバル化, バブル経済の崩壊, 消費人口の減少, 労働の機械化等の様々な要因が指摘されており, これらは大学教育の範疇を超えたものである。しかしながら, 情勢変化の一つの帰結として, 新規学卒者に対する労働市場の能力的要求が高まったことがあり, この点において大学教育に対する社会的要求が大きくなった。実際, 2010 年には大学設置基準が改正され(中央教育審議会諮問, 2010), 全ての大学に対し, 学生の職業的自立に向けた指導体制の整備が義務付けられるようになった。

他方, 時期を同じくして, 18 歳人口の減少と大学・短期大学の収容力の上昇が進んだ。その結果, 1990 年度に 36.3%であった大学・短期大学への進学率は, 急激に伸び続け, 2000 年度に 49.1%, 2010 年度に 56.8%となった(文部科学省, 2012)。この数値は国際的に見て高過ぎるものではないが, その急激な変化は, 大学受験をインセンティブとする旧来の日本の教育システムの機能低下を招き, 学生の学力や意欲の低下が指摘されるまでに至った(e.g., 岡部・戸瀬・西村, 1999; 島田, 2002)。この点においてもまた大学教育への社会的要求が大きくなり, 時代に応じた教育力の向上が求められるようになった。実際, 中央教育審議会答申(2011)においても, 大学の

* 山陽学園大学総合人間学部生活心理学科

** 山陽学園大学総合人間学部言語文化学科

キャリア教育・職業教育について、「ユニバーサル段階の高等教育における学生の多様性に配慮すべき」とする旨が記された。

こうした中、多くの大学は、その社会的役割を果たすべく、様々な教育活動に取り組んできた。例えば、初年次教育の充実、キャリアセンターや学習支援センターの設置、就職対策講座や資格取得講座の開講、リメディアル教育、自己理解のためのワークショップの実施等が挙げられる。これらの活動のねらいは多岐に渡り、内容や方法も千差万別であるが、文部科学省が示した「学士力」ⁱⁱ、経済産業省が示した「社会人基礎力」ⁱⁱⁱ、厚生労働省が示した「就職基礎能力」^{iv}、内閣府が示した「人間力」^v、OECD が示した「キー・コンピテンシー」^{vi}は、広く共有されているものであり、そうした力の育成を主眼にしたものが多い。本研究では、こうした力を伸ばすことを総じてキャリア形成と呼ぶことにする。

しかしながら、大学がそうした様々な教育活動に取り組み、政府もそれを支援してきたにも関わらず、新規学卒者の能力不足や学生の学力低下の問題は、今なお指摘され続けている。それはなぜだろうか。未だ教育活動が量的に不足しているだけなのかもしれないが、一つの理由として、大学と学生とのキャリア形成に対する意識のギャップが挙げられる。

まず、キャリア形成そのものに対する意識のギャップが想定される。例えば、下村(2009)は、大学のキャリアセンターの課題の一つとして、支援の場に大学生を引き込むことの難しさを指摘しており、その理由として「大学生にとって必ずしもキャリアの問題が優先順位の高い問題ではない」ことを挙げた。すなわち、大学側が想定する程に学生自身がキャリア形成に関心を向けておらず、教育活動が空回りしている可能性がある。

更に、キャリア形成に関心を向けていたとしても、その内容に関する認識のギャップが想定される。例えば、内閣府(1999)では、企業と学生との間での採用基準に関する認識のギャップについて述べられており、企業が基礎学力や取得資格を重視しているにも関わらず、それを就職活動時にアピールした学生が相対的に少ないことが指摘された。経済産業省(2010)においても、企業と学生との間での能力に関する認識のギャップについて述べられており、企業側は学生に対してコミュニケーション力等の内面的な基本能力の不足を感じているのに対し、学生はそれよりも技術・スキルが自らに不足していると感じていることが指摘された。すなわち、大学でのキャリア形成過程において、大学側が重視していたものと学生側が重視していたものが一致していなかった、あるいは大学が適切に方向付けることができていなかった可能性がある。

教える側と教えられる側とが関心や目標を共有せずして高い教育効果が期待されるはずもない。であれば、キャリア教育は、具体的な教育活動に先立って、キャリア形成に関する学生の意識の適切な方向づけから始められるべきである。そしてそのためには、まずは大学が学生のもつ意識をよく知らなければならない。

本研究は、こうしたキャリア形成に対する学生の意識への関心から、大学生の入学時のキャリア形成に関する意識の実態把握を目的とし、2010、2011、2012年の各年度の新入生に対し、入学時の4月期に意識調査を行った。また、大学が学生を適切に方向付けることができているのかどうかを知ることを目的とし、2010、2011年度の新入生に対しては2月期にも意識調査を行った。更に、2010年度の入学生に対しては、翌年の2月期、すなわち彼らが2年次となった2月期にも意識調査を行った。

方法

調査対象 調査対象は、S 大学総合人間学部生活心理学科および言語文化学科(いずれも教養教育を主とした文系学科)における 2010, 2011, 2012 年度の日本人の入学生であった^{vii}。2010 年度の入学生については期間を空けた別の時期に 3 回, 2011 年度生については期間を空けた別の時期に 2 回, 2012 年度の入学生については 1 回のみ調査を行った。いずれの調査においても調査への協力に同意した学生からのみ調査紙を回収した。氏名等の記入欄に不備があるもの、回答の記入が皆無のものは無効回答とした。一部の項目のみが無記入の回答については、分析手法に応じて項目単位あるいは標本単位で欠損値扱いとした。Table1 に各コホート・各調査回における有効回答の総数の詳細を示した。

調査内容 設問 1 の項目は 27 項目あり、(1)「仕事で求められる力に関する意識」についての 7 項目、(2)「キャリア形成に関する知識のメタ認知」についての 6 項目、(3)「キャリア形成に対する意欲」についての 7 項目、(4)「就職活動に対する意識」についての 7 項目で構成された。全ての項目が、与えられた文章について、順序性のある 4 つの選択肢(「全くそう思わない」、「あまりそう思わない」、「かなりそう思う」、「非常にそう思う」)から当てはまるもの一つを選択する回答形式であった。各項目の詳細は Table2 を参照されたい。なお、調査紙自体に(1)~(4)の見出しは付しておらず、項目の順序もこの通りではなかった。

設問 2 は、2011 年度入学生の第 2 回調査および 2010 年度入学生の第 3 回調査の一部の学生のみを対象にして設けられた。この設問は「基礎学力に関して、大学で講座や授業があれば受けてみたいと思うものがありますか。」というものであり、10 項目から当てはまるものを複数選択する回答形式であった。各項目の詳細は Table6 を参照されたい。なお、調査紙においては、項目の順序がこの通りではなかった。

調査手続き 記名式の一斉調査であった。4 月実施の第 1 回調査は、大学 1 年次の必修科目である「基礎演習 I」の時間帯を利用して実施した^{viii}。2 月実施の第 2 回以降の調査は、期末試験期間中に時間を設けて実施した「基礎学力テスト」^{ix}の時間帯を利用して実施した。学年や学科によって実施した教室や日時は異なった。調査紙を配布した上で、調査への協力依頼と回答方法の教示を文面および口頭で伝えた。このとき、個人を特定しない範囲で論文等の形式で集計結果を公表する可能性があること、協力に同意しない者は提出しなくてよいことも含めて伝えた。その場で回答を求めて調査紙を回収した。配布から回収までに要した時間は約 15~20 分であった。

Table1. 各コホート・各調査回における有効回答数 (人)

コホート	調査回と調査時期	男子	女子	合計
2010 年度入学生	第 1 回調査(2010 年 4 月)	7	31	38
	第 2 回調査(2011 年 2 月)	3	27	30
	第 3 回調査(2012 年 2 月)	5	29	34
2011 年度入学生	第 1 回調査(2011 年 4 月)	9	32	41
	第 2 回調査(2012 年 2 月)	7	25	32
2012 年度入学生	第 1 回調査(2012 年 4 月)	5	30	35

結果

分析Ⅰ 入学時のキャリア形成に対する意識

分析対象 入学時のキャリア形成に対する意識を知るため、2010、2011、2012年度の各コホートの第1回調査の設問1について分析を行った。各年度の人数は、それぞれ38名(男7,女31)、41名(男9,女32)、35名(男5,女30)であった。

結果 回答にコホート差があるかどうかを見るために、3コホート(2010年度、2011年度、2012年度)×4回答(全くそう思わない、あまりそう思わない、かなりそう思う、非常にそう思う)のクロス表についてKruskal-WallisのH検定を行った。その結果、いずれの項目においてもコホートによる各回答の人数に有意な差は見られなかった($p \geq .0018$, 全体の有意水準を $p < .05$ とした際にBonferroni法により調整された有意水準)。Table2には、コホートを混みにして入学時における各項目の選択肢ごとの回答者数を示した。

Table2. 入学時における設問1の各項目の選択肢ごとの回答者数(括弧内は比率)($n=114$)

項目	全くそう思 わない	あまりそう思 わない	かなりそう思 う	非常にそう 思う	欠損値
(1)「仕事で求められる力に関する意識」					
Q01.仕事をするうえで、コミュニケーション力が大切だ	0(.000)	1(.009)	17(.149)	96(.842)	0(.000)
Q02.仕事をするうえで、基礎学力が大切だ	1(.009)	17(.149)	54(.474)	41(.360)	1(.009)
Q03.仕事をするうえで、国語力が大切だ	0(.000)	2(.018)	54(.474)	58(.509)	0(.000)
Q04.仕事をするうえで、計算力が大切だ	1(.009)	32(.281)	57(.500)	23(.202)	1(.009)
Q05.仕事をするうえで、資格や免許が大切だ	1(.009)	7(.061)	66(.579)	40(.351)	0(.000)
Q06.仕事をするうえで、体力が大切だ	0(.000)	7(.061)	60(.526)	47(.412)	0(.000)
Q07.基礎学力よりも専門的知識のほうが大切だ	5(.044)	68(.596)	31(.272)	10(.088)	0(.000)
(2)「キャリア形成に関する知識のメタ認知」					
Q08.基礎学力が何を指しているのかよく分からない	19(.167)	61(.535)	26(.228)	8(.070)	0(.000)
Q09.検定試験にどんなものがあるのかよく分からない	11(.096)	43(.377)	51(.447)	8(.070)	1(.009)
Q10.就職活動で具体的に何をするのかよく分からない	3(.026)	16(.140)	57(.500)	38(.333)	0(.000)
Q11.会社や工場で普段何が行われているのかよく分からない	7(.061)	25(.219)	67(.588)	14(.123)	1(.009)
Q12.働いている人の気持ちがよく分からない	25(.219)	54(.474)	27(.237)	7(.061)	1(.009)
Q13.学習ソフトがどのようなものなのかよく分からない	13(.114)	53(.465)	32(.281)	15(.132)	1(.009)
(3)「キャリア形成に対する意欲」					
Q14.何かを学ぶことは楽しい	1(.009)	14(.123)	76(.667)	22(.193)	1(.009)
Q15.人と交流することは楽しい	0(.000)	17(.149)	51(.447)	46(.404)	0(.000)
Q16.何かの検定試験を受けてみたいと思う	3(.026)	14(.123)	48(.421)	48(.421)	1(.009)
Q17.将来について考えるために、色んな体験をするべきだ	0(.000)	4(.035)	50(.439)	60(.526)	0(.000)
Q18.PCやゲーム機の学習ソフトに興味がある	23(.202)	49(.430)	27(.237)	15(.132)	0(.000)
Q19.大学では勉強以外のことにももっと取り組みたい	2(.018)	27(.237)	42(.368)	43(.377)	0(.000)
Q20.打ちこんで取り組めるものが見つからない	21(.184)	53(.465)	32(.281)	7(.061)	1(.009)
(4)「就職活動に対する意識」					
Q21.就職に関する情報をもっと知りたい	1(.009)	20(.175)	61(.535)	32(.281)	0(.000)
Q22.教えてもらうだけでなく、自分でも就職情報を集めたい	2(.018)	12(.105)	70(.614)	30(.263)	0(.000)
Q23.必ず就職できるように頑張りたいと思う	1(.009)	5(.044)	38(.333)	70(.614)	0(.000)
Q24.将来、就職できるかどうか不安である	2(.018)	14(.123)	47(.412)	51(.447)	0(.000)
Q25.自分の将来のことは、親や教師ともよく相談するべきだ	1(.009)	13(.114)	73(.640)	26(.228)	1(.009)
Q26.自分の将来のことは自分一人で考えるべきだ	14(.123)	76(.667)	19(.167)	5(.044)	0(.000)
Q27.将来の道を決めるうえで、学校は頼りにならない	45(.395)	63(.553)	6(.053)	0(.000)	0(.000)

更に、各項目について、「あまりそう思わない」もしくは「全くそう思わない」の回答者数と、「かなり

そう思う」もしくは「非常にそう思う」の回答者数に二分し、各項目について二項検定(両側)を行った。その結果、いくつかの項目において有意な偏りが見られた($p < .0018$, 全体の有意水準を $p < .05$ とした際に Bonferroni 法により調整された有意水準)。Table2 においては、そのような項目の比率の高い方に属する回答に網掛けを付した。

また、(1)「仕事で求められる力に関する意識」(Q01~Q07)については、新入生が特に何を重視しているかを見るために各項目を対応のある条件として Friedman の検定を行った^x。その結果、全体に有意な差が見られた($\chi^2(6)=268.463$, $n=112$, $p < .05$)。Ryan 法により調整された有意水準(両側)を用いて、各ステップについて符号検定を行ったところ^{xi}, 平均ランクの高い項目から順に、Q01「コミュニケーション力」が Q03「国語力」よりも、Q03「国語力」が Q05「資格や免許」よりも、Q06「体力」と Q05「資格や免許」と Q02「基礎学力」が Q04「計算力」よりも、Q04「計算力」が Q07「専門的知識」よりも有意にランクが高かった。これらの結果を Table3 に示した。

Table3. 新入生が「仕事で求められている力」と考える項目の平均ランク

項目	平均ランク	有意差のあった最小ステップの z
Q01.仕事をするうえで、コミュニケーション力が大切だ	5.71	>Q03($z=-5.879$, $n=114$, $p < .014$)
Q03.仕事をするうえで、国語力が大切だ	4.71	>Q05($z=-3.549$, $n=114$, $p < .007$)
Q06.仕事をするうえで、体力が大切だ	4.30	>Q04($z=-4.625$, $n=113$, $p < .004$)
Q05.仕事をするうえで、資格や免許が大切だ	4.07	>Q04($z=-4.503$, $n=113$, $p < .007$)
Q02.仕事をするうえで、基礎学力が大切だ	3.98	>Q04($z=-3.571$, $n=112$, $p < .014$)
Q04.仕事をするうえで、計算力が大切だ	3.13	>Q07($z=-4.510$, $n=113$, $p < .014$)
Q07.基礎学力よりも専門的知識のほうが大切だ	2.10	

分析Ⅱ キャリア形成に対する意識のその後の変化

分析対象 キャリア形成に対する意識の時系列での変化を知るため、全ての回の調査に参加しなかった者を分析から除外して設問 1 の分析を行った。分析対象となったのは、2010 年度の入学生が 26 名(男 2, 女 24), 2011 年度の入学生が 32 名(男 7, 女 25)であった。

結果 2010 年度入学生の 3 回にわたる調査結果の変化を知るために、全ての項目について、調査時期を対応のある条件として Friedman の検定を行った^{xii}。その結果、いずれの項目においても平均ランクに有意な差は見られなかった($p \geq .0018$, 全体の有意水準を $p < .05$ とした際に Bonferroni 法により調整された有意水準)。Table4 には、2010 年度入学生の 3 回の調査それぞれにおける各項目の選択肢ごとの回答者数を示した。

同じく 2011 年度入学生の 2 回にわたる調査結果の変化を知るために、全ての項目について、調査時期を対応のある条件として符号検定を行った^{xiii}。その結果、いずれの項目においても符号に有意な差は見られなかった($p \geq .0018$, 全体の有意水準を $p < .05$ とした際に Bonferroni 法により調整された有意水準)。Table5 には、2011 年度入学生の 2 回の調査それぞれにおける各項目の選択肢ごとの回答者数を示した。

分析Ⅲ キャリア教育に対する希望

分析対象 学生のキャリア教育に対する希望を知るため、設問 2 について分析を行った。分析対象となったのは、2010 年度の入学生が 21 名(男 3, 女 18), 2011 年度の入学生が 32 名(男 7, 女 25)であった。

結果 回答にコホート差(あるいは学年差^{xiv})があるかどうかを見るために、コホート 2(2010 年度

入学生, 2011 年度入学生) × 回答 4(全くそう思わない, あまりそう思わない, 非常にそう思う) のクロス表について χ^2 検定を行った。その結果, いずれの項目においてもコホートによる各回答の人数に有意な差は見られなかった ($p \geq .005$, 全体の有意水準を $p < .05$ とした際に Bonferroni 法により調整された有意水準)。Table6 には, 入学年度を混みにして各項目の選択者数を示した。

選択者の比率に項目間で違いがあるかどうかを見るために, 項目を対応のある条件として Cochran の Q 検定を行った。その結果, 全体に有意な差が見られた ($\chi^2(9)=95.745$, $n=53$, $p < .05$)。Ryan 法により調整された有意水準(両側)を用いて, 各ステップについて McNemar の検定を行ったところ, Q01「礼儀・マナー」と他の項目の間でのみ有意な差が見られた。Q01 以外の項目の各ステップで差が見られなかったのは, 非選択者が多かったためであると考えられる。

Table4. 2010 年度入学生の各調査における設問 1 の各項目の選択肢ごとの回答者数 ($n=26$)

	全くそう思わない			あまりそう思わない			かなりそう思う			非常にそう思う			欠損値		
	1回	2回	3回	1回	2回	3回	1回	2回	3回	1回	2回	3回	1回	2回	3回
(1)															
Q01	0	0	0	0	0	0	8	10	12	18	16	14	0	0	0
Q02	0	0	0	3	1	4	12	19	15	11	6	6	0	0	1
Q03	0	0	0	0	1	3	16	16	12	10	9	11	0	0	0
Q04	0	0	0	7	6	9	12	18	15	6	2	2	1	0	0
Q05	0	0	0	0	3	9	18	20	13	8	3	4	0	0	0
Q06	0	0	0	0	1	2	15	14	14	11	11	10	0	0	0
Q07	1	1	1	17	14	17	7	11	6	1	0	1	0	0	1
(2)															
Q08	4	3	2	14	14	14	7	7	10	1	2	0	0	0	0
Q09	4	2	2	11	9	8	11	12	14	0	3	2	0	0	0
Q10	1	0	0	4	6	2	12	16	14	9	4	10	0	0	0
Q11	1	0	0	4	7	5	18	18	21	3	1	0	0	0	0
Q12	6	2	3	14	16	12	3	8	10	2	0	1	1	0	0
Q13	1	2	5	15	10	11	8	13	9	2	1	1	0	0	0
(3)															
Q14	0	0	0	2	4	5	20	19	17	4	3	3	0	0	1
Q15	0	0	1	2	4	4	16	18	14	8	4	5	0	0	2
Q16	0	0	1	4	2	4	14	19	14	8	5	6	0	0	1
Q17	0	0	0	0	1	0	14	16	16	12	8	9	0	1	1
Q18	2	2	3	12	15	14	8	8	8	4	1	1	0	0	0
Q19	1	0	1	6	5	5	12	15	15	7	6	4	0	0	1
Q20	4	4	3	14	11	13	6	10	8	1	1	1	1	0	1
(4)															
Q21	0	0	0	4	2	1	15	20	17	7	4	8	0	0	0
Q22	0	1	0	3	3	6	19	20	17	4	2	3	0	0	0
Q23	0	0	0	1	0	0	7	14	14	18	12	12	0	0	0
Q24	0	1	0	2	1	4	15	13	13	9	10	9	0	1	0
Q25	0	1	1	4	3	6	21	17	11	1	4	6	0	1	2
Q26	1	0	3	20	17	13	4	5	5	1	3	3	0	1	2
Q27	6	4	2	19	20	20	1	0	2	0	1	1	0	1	1

*網掛けは見やすさに配慮して付したものである。

Table5. 2011 年度入学生の各調査における設問 1 の各項目の選択肢ごとの回答者数 (n=32)

	全くそう思わない		あまりそう思わない		かなりそう思う		非常にそう思う		欠損値	
	1回	2回	1回	2回	1回	2回	1回	2回	1回	2回
(1)										
Q01	0	0	0	0	4	4	28	28	0	0
Q02	1	0	6	5	14	15	11	12	0	0
Q03	0	0	0	0	13	19	19	13	0	0
Q04	0	1	9	5	14	19	9	7	0	0
Q05	0	1	4	7	18	19	10	5	0	0
Q06	0	0	2	0	17	20	13	12	0	0
Q07	2	3	19	14	7	10	4	5	0	0
(2)										
Q08	6	5	13	22	12	5	1	0	0	0
Q09	0	4	11	16	16	9	4	3	1	0
Q10	1	1	4	6	14	15	13	10	0	0
Q11	2	1	5	6	20	19	4	6	1	0
Q12	7	6	17	19	6	7	2	0	0	0
Q13	4	6	11	15	9	8	7	3	1	0
(3)										
Q14	0	0	3	5	21	23	7	4	1	0
Q15	0	0	5	5	8	19	19	8	0	0
Q16	1	0	5	5	11	13	15	14	0	0
Q17	0	0	0	0	10	16	22	16	0	0
Q18	8	13	10	8	9	8	5	3	0	0
Q19	1	0	7	3	10	17	14	11	0	1
Q20	10	3	15	17	6	9	1	3	0	0
(4)										
Q21	1	0	4	4	16	18	11	10	0	0
Q22	1	0	2	3	19	22	10	7	0	0
Q23	1	0	0	2	9	12	22	17	0	1
Q24	1	1	4	5	10	10	17	16	0	0
Q25	1	1	2	4	18	17	11	10	0	0
Q26	5	5	17	19	7	6	3	2	0	0
Q27	18	10	11	22	3	0	0	0	0	0

*網掛けは見やすさに配慮して付したものである。

Table6. 設問 2 の各項目の選択者数 (括弧内は比率) (n=53)

項目	選択者	非選択者	有意差のあった最小ステップの χ^2
Q01. 礼儀・マナー	43(.811)	10(.189)	& Q02($\chi^2=20.833, p<.010$)
Q02. 作文	17(.321)	36(.679)	& Q01($\chi^2=20.833, p<.010$)
Q03. パソコンの基本操作	16(.302)	37(.698)	& Q01($\chi^2=21.806, p<.005$)
Q04. 基礎的な計算	14(.264)	39(.736)	& Q01($\chi^2=25.290, p<.002$)
Q05. 高校までの数学	14(.264)	39(.736)	& Q01($\chi^2=25.290, p<.002$)
Q06. 高校までの英語	14(.264)	39(.736)	& Q01($\chi^2=25.290, p<.002$)
Q07. 高校までの地歴・公民	14(.264)	39(.736)	& Q01($\chi^2=23.758, p<.001$)
Q08. スピーチ	13(.245)	40(.755)	& Q01($\chi^2=26.281, p<.001$)
Q09. スタディスキルズ	8(.151)	45(.849)	& Q01($\chi^2=29.641, p<.001$)
Q10. 高校までの物理・化学・生物	7(.132)	46(.868)	& Q01($\chi^2=30.625, p<.001$)

考察

I 入学時のキャリア形成に対する意識について

(1)「仕事で求められる力に関する意識」についていえば、大半の新入生が「コミュニケーション力」、「基礎学力」、「国語力」、「計算力」、「資格や免許」を「仕事をするうえで大切なもの」として意識しており、これは社会の要求、大学の育成目標と一致する。相対的に見ても「コミュニケーション力」を特に重視しており、これについても企業が学生の内面的な基本能力の不足を感じていると指摘される中で(経済産業省, 2010), 適切な意識であるといえる。ただし、「計算力」の重要性が相

対的に見てやや低く意識されている。

(2)「キャリア形成に関する知識のメタ認知」についていえば、大半の新入生が「基礎学力」と「働いている人の気持ち」を「よく分かっているもの」としている。もしその中身を正しく理解しているならば好ましいことであるが、正しく理解していないのならば危険な認知となる。この点については更なる調査が求められる。逆に、大半の新入生が「就職活動の具体的内容」と「会社や工場で普段行われていること」を「よく分からないもの」としている。新入生の経験や発達を鑑みれば、これは当然の認知であるといえる。また、「検定試験」と「学習ソフト」については回答が分かれている。

(3)「キャリア形成に対する意欲」についていえば、大半の新入生が「何かを学ぶこと」と「人と交流すること」を楽しみとし、「何かの検定試験の受験」と「将来に向けての体験」と「勉強以外の活動への取り組み」に対して意欲を示している。新入生はキャリア形成に対し、大学が期待する通り、総じて意欲的であるといえる。

(4)「就職活動に対する意識」についていえば、大半の新入生が「就職に関する情報をもっと知りたい」、「自分でも情報を集めたい」、「必ず就職できるように頑張りたい」という意識をもっていると同時に、「就職できるかどうか不安である」としている。また、大半の新入生が「自分一人で考えるべきだ」とか「学校は頼りにならない」とはしておらず、「親や教師ともよく相談するべきだ」としている。新入生は学校の指導に期待をもっており、周囲の支援や援助に対しても親和的な姿勢をもっているといえる。

II キャリア形成に対する意識のその後の変化について

2010年度入学生においても、2011年度入学生においても、時系列上の変化が見られなかった。9割方の学生が第1回調査の時点で「非常にそう思う」と回答した2011年度生のQ01に関しては天井効果によるものと考えられるが、それ以外の項目については、大学教育の効果に疑問を呈するような結果であったといえる。

(1)「仕事で求められる力に関する意識」(Q01からQ07)についていえば、いずれの項目においても、第1回調査の時点で偏りが大きかったが、望むべきはその意識がより高まることである。しかし、少なくとも高い方に意識が変化しているとはいえなかった。大学の教育は、社会で求められている力の重要性を十分に伝えきれていないのかもしれない。

(2)「キャリア形成に関する知識のメタ認知」(Q08からQ13)については、「よく分からない」としていた学生が、よく分かるようになっていたとは言えなかった。大学は、学生に対して適切な情報提供ができていないのかもしれない。

(3)「キャリア形成に対する意欲」(Q14からQ20)については、いずれの項目においても、第1回調査の時点で偏りが大きかったが、望むべきはその意識がより高まることである。しかし、少なくとも高い方に意欲が変化しているとはいえなかった。大学の教育は、学生の意欲をより高めるようなものになっていないのかもしれない。

(4)「就職活動に対する意識」(Q21からQ27)についていえば、第1回調査の時点で偏りが大きかったが、望むべきはその意識がより高まることである。とりわけ2010年度の入学生は第3回調査の時点で2年次末であり、就職活動に対する意識がより高まってしかるべきである。しかし、少なくとも高い方に意識が変化しているとはいえなかった。大学の教育は、学生の意識をより高めるようなものになっていないのかもしれない。

III キャリア教育に対する希望について

多くの学生が、いくつかの項目の中で、とりわけ「礼儀・マナー」の対策講座を求めていることが

分かった。新聞等の一般的な言論においては、新入社員の礼儀やマナーに対する苦言ともとれる記述が散見されるが、この結果を見ると、大学生は礼儀やマナーを軽んじているわけではなく、むしろ学ぶ意欲をもっているといえる。それにも関わらず、それを学ぶための場が不足しているために、礼儀やマナーで失敗するケースがあるのであろう。

IV 総合考察

調査結果より、新入生が総じてキャリア形成に対して適切で高い意識・意欲をもっていることが分かった。これは好ましいことである。ではなぜこれまで意識のギャップが指摘されてきたのだろうか。第一に考えられるのが、調査対象となった大学の特性が反映されたということであるが、これについては調査の対象範囲を広げて比較分析しなければ何ともいえない。第二に考えられるのが、従来の大学生と調査対象となった大学生のコホート差である。実際、近年の大学生が従来の大学生像とは異なるという指摘がなされている。

例えば、半澤(2011)は、従来の研究では大学生の学業離れや意欲低下を指摘するものが多かったのに対し、近年の研究や実態調査では大学生が学業を重視している傾向を明らかにしているものが多いことを指摘している。これも大変好ましいことであるが、ではなぜそのような変化が起こったのだろうか。これについて、半澤(2011)は、その背景に学びを将来の職業と関連付けたいという意識があると推察している。

この推察が正しかったとして、ではなぜそのような意識が強まったのであろうか。第一に考えられるのが、高校までのキャリア教育の成果である。第二に考えられるのが、新規学卒者を取り巻く雇用情勢の悪化に対する認識が広まったことである。恐らくそれは高校までのキャリア教育の中でも触れられているだろうし、家庭でも話題になっていることであろう。新入生が高い危機感をもって大学生活に臨もうとするのは当然のことである。

他方、学年が上がっても、その意識・意欲がより高まっているとはいえなかった。調査対象となった S 大学でも、キャリアセンター、ラーニングセンター等を設置しインターンシップをはじめとしたキャリア形成のための様々な支援を行っているし、正課内においてもキャリア形成に向けた様々な教育を行っている。それにも関わらず、学生の意識・意欲にその影響が表れていないのはなぜだろうか。調査対象となった S 大学は財団法人日本高等教育評価機構による認証評価でも適格という認証を受けており、とりわけキャリアセンターをはじめとする学生支援サービスについては、「きめ細かい対応」という判定理由を得ている(日本高等教育評価機構, 2011)。したがって、調査対象となった大学固有の問題とは考えにくい。より一般的な大学のキャリア教育の問題と考えるべきではないだろうか。

例えば、前田・新見(2010)も、キャリア意識尺度を用いた調査を行い、高校1～3年生と大学生3, 4年生について横断的な比較を行っているが、その分析結果から、高校生から大学生にかけて顕著な発達差が見られないと判断している。

もちろん、大学生のキャリア意識が本当に発達していないのかどうかを正しく検証するためには更に多くの調査が必要になるだろうが、コホートの影響が強く表れうる発達であるし、何より今現在の大学生にとっては一度きりの切実な問題である。我々は、これを大学教育の問題として受け止め、その改善にこそ努めていくべきではないだろうか。

そこで最後に、本調査の結果を踏まえたうえで、大学のキャリア教育に対する提案を述べる。総じていえば、それはより早期からのキャリア教育の実施である。

V 大学のキャリア教育への提案

資格・検定試験に関する入学前指導と統合的な情報提供 大半の新入生が「何かの検定試験の受験」に意欲を示していたにも関わらず、新入生の中には「検定試験」について「よく分からない」としている者がおり、またその認知は学年が上がっても変化していなかった。つまり意欲はあるが、適切な知識が不足している学生が存在し続けているのである。そのような状態が長引くことになれば、意欲が低下していくことも予想される。

特に初年次は、キャリア形成の過程において、まず具体的な目標をもち、スキルアップを目指すべき学年であり、資格・検定試験に関する知識は重要である。したがって、学生は、早期にその知識を十分に獲得しなければならない。

しかしながら、実のところ、調査対象となった S 大学では、入学直後のオリエンテーション期間にそのガイダンスを行っている。恐らくそれは他大学でも同様であろう。科目登録を考えるうえで必要な情報になるからである。ではなぜ「よく分からない」とする学生が存在したのだろうか。これは新入生の4月当初の状況を考えれば無理もないことであろう。4月当初、新入生は、高校までとは全く異なる大学の様々なシステムを数日間で理解し、大学生活に適応していかなければならない。この時期は、大学が実施するガイダンスも数多く、早朝から夕刻まで分刻みで行われる。正課についての理解が第一に求められている新入生の資格・検定試験に対する注意が低下するのも想定できることである。

したがって学生は、入学前から情報を得ておくことが望ましい。よって、大学は入学前にそのガイダンスを開催すべきである。そもそもキャリア形成の計画は数日間で決められる類の問題ではないのだから、入学前から考えさせておくことも理に適っている。入学前までに目標をもっておくことは、大学生活に対する意欲の更なる醸成にも繋がるであろう。

また、統合的な形で情報提供を行うことも重要である。目標が明確に決まっていない学生は、幾つかある可能性の中から自分に適したものを選び出すようにして計画を立てていくと想像される。ところが特定の資格や検定試験の情報が個別に順次提供されていたのでは選択しにくい。

就職活動の指導の初年次学生への開放 大半の新入生が「就職活動で具体的に何をするのかよく分からない」とした一方で、就職への不安や、就職に関する情報収集に意欲を示していた。大学の具体的な就職活動の指導は2年次以降に始められることが多いが、このように新入生が既に高い関心と不安をもっていることを考えれば、新入生に対してそうした授業や講座を開放してもよいのではないだろうか。自身が就職活動の本格化する時期に何をしなければならぬことになるか、その将来像のイメージを初年次にもっておくことは、それまでのキャリア形成をより有益なものにする期待できる。

礼儀・マナー指導の拡充 社会が要求し、大学が期待し、そして学生自身が要望している指導の拡充に取り組まない選択肢はない。

i 大学設置基準第42条の2 大学は、当該大学及び学部等の教育上の目的に応じ、学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができるよう、大学内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整えるものとする。(施行は2011年4月)。

ii ①知識・理解, ②汎用的技能, ③態度・指向性

iii ①前に踏み出す力(アクション), ②考え抜く力(シンキング), ③チームで働く力(チームワーク)

iv ①コミュニケーション能力, ②職業人意識, ③基礎学力, ④ビジネスマナー, ⑤資格取得

- v ①知的能力的要素, ②社会・対人関係力的要素, ③自己制御的要素
- vi ①自律的に行動する能力, ②多様な社会グループにおける人間関係の形成能力, ③社会・文化的, 技術的ツールを相互作用的に活用する能力
- vii 同様の調査は, 留学生に対しても, 他学部においても, 短期大学においても実施した。しかし国籍・学部・学校種が異なると, 学生の回答傾向が大きく異なり, 学校が実施しているキャリア教育の内容も同様ではないので, 本研究では特定学部の日本人学生のみを分析対象とした。
- viii いずれの年度においても, 同時帯に基礎学力テストを行っており, そのテストが終了した後の残った授業時間を利用して調査を実施した。基礎学力テストとは, 語彙力を中心とした国語の業者テストと, 計算を中心とした数学の小テストであり, 1 年次生の基礎学力を知るためのものであった。
- ix いずれの年度においても, 語彙力を中心とした国語の業者テストであり, 在学生の学力向上の様子を知るためのものであった。
- x 欠損値があった場合は標本単位でデータを除外した。
- xi 欠損値があった場合は比較対単位でデータを除外した。
- xii 欠損値があった場合は項目単位でデータを除外した。
- xiii 欠損値があった場合は項目単位でデータを除外した。
- xiv この調査の時点で, 2010 年度入学生は 2 学年次であり, 2011 年度入学生は 1 学年次であった。

引用文献

- 半澤礼之 2011 大学生の学びとキャリア意識の発達-大学での学びによる発達を前提としたキャリア研究という視点 心理科学, 32, 22-29.
- 経済産業省 2010 大学生の「社会人観」の把握と「社会人基礎力」の認知度向上実証に関する調査 経済産業省 2010 年 6 月
 <[http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/201006daigakuno\[syakaijinnkan\]no_haakutonintidokoujyounikansurutyousa.pdf](http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/201006daigakuno[syakaijinnkan]no_haakutonintidokoujyounikansurutyousa.pdf)>(2012 年 10 月 31 日)
- 前田健一・新見直子 2010 高校生と大学生のキャリア意識とアイデンティティ・スタイル 広島大学大学院教育学研究科紀要, 59, 65-73.
- 文部科学省 2012 平成 23 年度文部科学白書 佐伯印刷
- 内閣府 1999 平成 11 年版国民生活白書 大蔵省印刷局
- 日本高等教育評価機構 2011 平成 22 年度大学機関別認証評価 評価報告書 山陽学園大学 2011 年 3 月
 <http://www.sguc.ac.jp/assets/files/colle-pdf/30_sanyo.pdf>
- 岡部恒治・戸瀬信之・西村和雄 1999 分数のできない大学生 東洋経済新聞社
- 島田博司 2002 私語への教育指導—大学授業の生態誌 2 玉川大学出版部
- 下村英雄 2009 大学のキャリアセンターの本質とは何か 職業研究, 2009 秋期号, 3-5.
- 中央教育審議会 2010 大学設置基準及び短期大学設置基準の改正について(諮問) 文部科学省 2010 年 1 月 29 日
 <http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1289824.htm>(2012 年 10 月 31 日)
- 中央教育審議会 2011 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について 文部科学省 2011 年 1 月 31 日
 <http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf>(2012 年 10 月 31 日)